D-3 三島・沼津周辺部

～一足のばして～

沼津駅から北に向うと、井上靖の母校である沼津東高校があり、更に北に向うとクレマチスの丘（長泉町）に井上靖文学館があります。井上文学館へは、三島駅から無料シャトルバスも出ています。一方、南の沼津御用邸方面に向うと、その手前に沼中の海水浴場であった牛臥浜があります。ともに中心部から離れているので、バス又は車での移動になりますが、井上靖文学館や牛臥浜の周辺は、井上靖関係以外にも文化施設や文学関係の見どころがたくさんあるおすすめエリアです。

❶沼津東高校

井上靖が通った沼津中学は、昭和20年に沼津東高校となり、昭和42年に現在の場所に移転しました。沼津東高の構内には、かつての沼津中学の正門が移築されています。また、井上靖の言葉が、同じく卒業生の芹沢光治良の言葉とともに、一つの文学碑に刻まれています。

潮が満ちて来るような、そんな満たし方で、人は己が生涯を何ものかで満たすべきだ。
井上靖

移築した沼中正門

❷井上靖文学館

井上靖文学館は、『あすなろ物語』の中で「寒月ガ　カカレバ…」と歌われた愛鷹山のふもとのクレマチスの丘にあります。館内には、井上靖の全著書、貴重な生原稿、写真パネルなどが展示・収蔵されています。また、前庭には「思ふどち…」の文学碑（P21参照）が建っています。
（休館：毎週水曜
TEL055-986-1771）

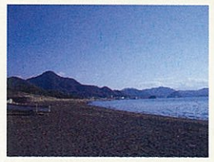
❸牛臥浜（沼中海水浴場）

沼津中学の海水浴場は、作品の中では「静浦」とありますが、実際には当時は沼津御用邸北側の牛臥浜にありました。『夏草冬濤』の冒頭の場面で、五年生によって飛込台に置き去りにされた洪作は、この浜で藤尾たち上級生に出会います。牛臥浜は現在、ウィンドサーフィンが盛んですが、この付近は、潮の音プロムナードとしてウォーキングコースも整備されて、美しい景色はもとより、御用邸や芹沢文学館・芹澤光治良文学碑、展望水門びゅうおなど、見どころがたくさんあります。

沼津御用邸

芹沢光治良文学碑

芹沢文学館



牛臥浜より駿河湾を望む

E 土肥

～新たな旅立ち～

『夏草冬濤』は、沼津港から船に乗った洪作たちが、土肥の波止場に上陸するところで終わっています。

土肥港へは、沼津港から船で行く方法や、国道136号線を船原峠を越えてバスまたは車で行く方法などがあります。洪作たちが上陸した港は、現在のフェリー発着場より2km北の土肥漁港です。その付近は現在、松原公園として整備され、松原大橋のたもとには若山牧水の銅像・文学碑もあります。また、漁港から更に五〇〇m北の旅人岬からは、土肥港の全景を望むことができます。

～『夏草冬濤』より～
洪作は甲板の上に半身を起した。岸はまだ遠かったが、船は殆ど停止したような状態になっており、何人かの船客が船室から甲板へと出ようとしていた。土肥の部落らしい民家の固まりと、白い砂と、松林とがインキを流したような青い潮の向うに見えている。木部が、「おい、これはどうだ!?」と言って、小さいノートを差し出して来た。洪作は受け取って、それを覗き込んだ。そこには次のような歌が五行に書かれてあった。
——長く長く、
汽笛は鳴りて、
いざ、土肥と、
まなこ上げし空に
白き雲あり。
洪作は空を仰いだ。

旅人岬から土肥港を望む
松原大橋たもとの若山牧水文学碑

下田公園から下田港を望む

下田の内港

土肥港

松林（松原公園）と砂浜

～『しろばんば』より～
「よいとこしょ、よいとこしょ」おぬい婆さんは一歩一歩足を運ぶために口からかけ声を出した。丘といっても蜜柑の木の植わっている小さい丘で、五分程、細いだらだら坂を上って行くだけの話だったが、洪作はおぬい婆さんために何回も休んでやった。丘の上には小さい神社があった。その境内に足を踏み入れると、部落の小さい入江が眼下に見降ろすことができた。「たんと舟がいるな」洪作は思わず口に出して言った。それほどその小さい入江は大小の舟で埋まっていた。しかもどの舟も幟と旗で飾られてあった。洪作は何か夢でも見ているような気持ちだった。入江は波立ち、舟は揺れ動いていたが、しかし、その情景は洪作には一枚の絵でも見ているように、ひどく静かなものに思われた。

F 下田

～おぬい婆さんのふるさと～

洪作は『しろばんば』の中で、おぬい婆さんの郷里の下田を訪ねます。おぬい婆さんと馬車に乗って、下田街道を南に向かい、天城隧道を抜けて、湯ヶ野を通り、下田の町まで三時間もかかりました。下田港で舟を見て、旅館で一泊した後、馬車に一時間乗って、おぬい婆さんが生まれた"小さい入江を抱えた小さい漁村"に向います。この漁村がどこであるかは特定できませんが、作品の描写からすると、現在の須崎あたりでしょうか。

下の写真は、須崎の多賀神社から漁港を見降ろしたものですが、周囲にはのどかな雰囲気が残っており、作品世界をイメージできる場所の一つです。

須崎漁港を見降ろす

～『夏草冬濤』より～
飛込台に上がって来たのは岡という生徒だった。「ここから飛び込みな」岡は言った。その口調は静かだったが、ひどく残酷なものを持っていた。「ここから飛び込む？」洪作は海面を見降ろした。陸から見ると、飛込台はそれ程の高さには見えなかったが、いざその上に上がってみると、潮の面までは相当の距離があった。飛込台のところまで泳いで来られないくらいであるから、ましてその上から飛び込むというようなことは思いもよらないことだった。「さあ、飛び込め」岡はねめつけるようにしていたが、「飛び込まないと、突き落とすぞ」「本当に、俺は、泳げないんだ」「何を言っていやあがる。三年にもなって泳げない奴があるか。泳げないなら、泳げるようにしてやらあ」岡が一歩体を近付けて来たので、洪作はあたりを見廻した。しがみつくものはどこにもなかった。